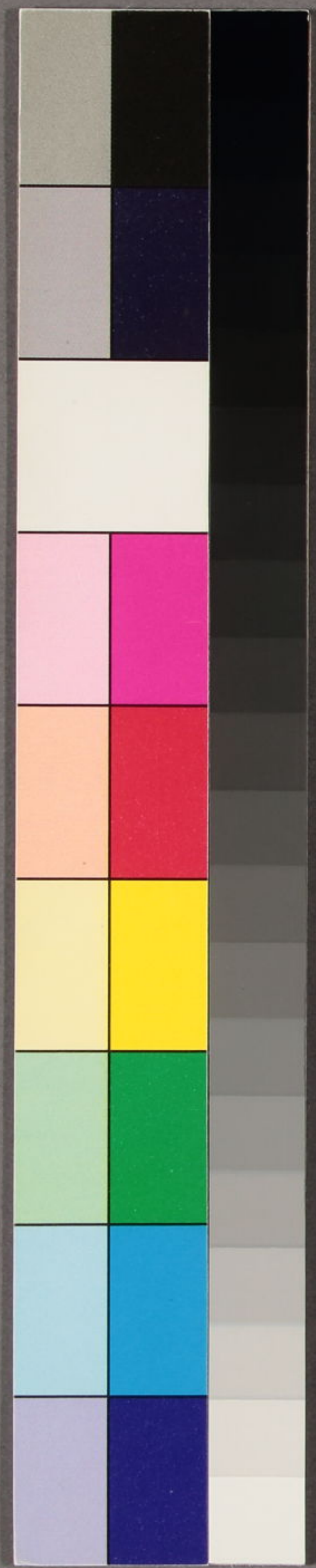


神風は伊勢の大神神を詣りて
とみえにありて久しき日の光るふ
けいふ満ちてより松島家流と杖を
曳き老ふのちは是れ老い也けき猶
道祖神のときよりあまた又戦路
信濃路と旅より旅よりつみまを
く見きつりくる友の戦ひより少
なりけしきもたふし人のきこえは後の

天保4年

玉璫よりあて標紙を中へ入るるまで
序のついでにきくれば像の前へ
今一移り進みしよりあつた時の集と
名をいふ人ききしよりいふ人

丁未去三月

即ち見外

元禄の正風を世にあらわす人
思ふ所のままに筆をふる人
心ゆくままに筆をふる人
只此公卿のいふより

余がくもえり清書家のむかしが 白雄
世よりあつた小甚な時分なり 士朗
心ゆくままに筆をふる人 道彦
魚をえりし家等の時分なり 長翠

時向唐也——久世の松を我子折
 法子 素も唐也 熟みそ折 經今
 所 法子も素も——久世の天々下
 梅 金

因に好むを分先哲の吟を記す
 此れは唐武の實を記す好む

上尺結山免河一し木口為ふ所

公

源中水たつて冬の水に水
 朝夕千葉葉子もいぬ若くは
 春更けの燈の光もいぬ
 雪鞋を月見交ふ年費安けり
 肩をうたつてさういふ水も
 南々
 鶏
 周
 茶
 三
 西
 馬
 波
 平

時向舎や月あふ房は顔の魚

鶏周

昨日をくちあふ筒の山菜

見外

丹戸をくち飯の組板押さへ

菊々

あふくち世帯平手紙を

波平

あふめを志つる市の時鳥

西馬

病のくち程い風を河を

一飲

聖只た月形はの湯の着の里

五渡

夢中酒をくち流しあふ

心足

又あふくち他はきこれの

井燈

ふあふくちあふくちたの

妻と

瑞燭のくちくち摺に

居々

田の酒のれをくちくちす

風不

鈴あふくちあふくちあふ

百尺

月あふくちあふくちあふ

一歩

地をすくね料理の喰う好く
 永 雄
 みねのいふより遠い溪谷
 永 久
 東の山を端山志丹山花年集り
 兄 卯
 光——くわくしし雪の志を起
 朱 山

花をあらたけく——と縁め只苦勞
 白 雄
 心をふるふを親もき——へ男そ
 道 彦
 数ふふの心を新くきくふり
 長 翠
 島くに水明はう程——と門 操
 保 吉
 山里の清きふきふき——と 操
 栄 兆
 心をひきおきふきふき——と 進
 菊 三
 何——と花を人に見せぬき——と 雄
 護 物
 子代種へ夢をえきき——と 雄
 雄 岩

月居
 乙二
 万和
 嵐外
 半池
 鳳郎
 葦村

萬 戶 千 百 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一

弓八袋居二一書中一今新のまふ
 元日此名を中一板中此よりそ
 老を禁中此舟中二日の南四門
 陽空の中ふ二をうさの水の乾
 か茂川小松の流るる子日の柳
 川中一人を族父山主人善達とす
 幾多の夢中一を花の山可丸

江戸

一 蕙
 意
 菜
 大
 碩
 芳
 所

一 蕙 意 榮 大 頤 芳 可
九 鵲 齊 梅 鳩 何 凡

河をさぐりて法を尋ねて
 中にある蘇や人の法を辨し
 法堂や都の西に坐す
 花をらん其の意をわきま
 衣をまき法を説く
 寺をめぐりて法を説く
 柴やをまき法を説く
 夏をけりて法を説く

履の紐を解く此布の無の月
 物也そのく志は夢ゆ——江山
 山道や木枯葉あり——みけの雪
 絲のくまを春のふりて那——春の雨
 あふふも果敢のくもそそ門鶴
 えり法に書や空をのり法きと起
 人夢せし白き夢るや春の風
 春の雨や鳩ののりて人る法と
 米山

市々物々明々や磯の松 柏樹
人々冥冥もも法具の如 一具
正月中にても明々を望む 由望
花々や新題目を口に出す 見亦
咲噴く花々もももも 遙 創

合歌の中や 給々只々水々 常陸 磐山
伸々葉々新々もももも 蓮の如 一 眺

桑合の中や 給々只々水々 聖 葉
市々物々明々や磯の松 下 葉
衣々々々物々や小庭法具の如 桂 丸
友の如くおもひもももも 鶴川人 本 竹
物々々々もももももも 如く友の月 仁 里
西合志々し聖法如く光々水の如く 上 呼 牙
長閑さや 瀑の川の水 濁 東 悟
冬々川の水々々々々々々 葉 白

空をうけた連なりそはて果古島 子外
 庭の梅物もむねのわが夢見 一 渚
 咲きし花も一葉のわが夢見 子外
 秋の山も一葉のわが夢見 子外
 山をのぞくと四月の月ありふり 相模 雄 吟
 七曜の光りありては 春 鳩
 花はまゝ咲き梅のわが夢見 如 々
 是はふれ夢のわが夢見 可 谷

今河川の月ありては 立 岸
 人夢のわが夢見 甲斐 雲 里
 花のわが夢見 漫 々
 惟子や花のわが夢見 秋 葉
 花のわが夢見 伊豆 一 瓢
 花のわが夢見 碧 山
 花のわが夢見 見 路
 花のわが夢見 山

かき豆喰ちり合ふて味本様々三河水作
鯉魚や箸も持もふりわたりき 完伍
高と程いふも出まじし浦の月尾張沙鷗
柳々々々々々々々々々々々々々々々 而后
明々々々々々々々々々々々々々々々 莫山
雲々々々々々々々々々々々々々々々 伊勢 湛石
川浪のふと寄るふかしし層の 筋 石 罅
音の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 伊賀 書 凡

秋風やそつ程う〜々々々々々々々 大坂 長 齋
三日月やあやうきしるる漁の 船 沈 叟
大うへへへへへへへへへへへへ 水 男 左
雲々々々々々々々々々々々々々々々 具 山
細形子産家法に〜々々々々々々々 素 屋
ふ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 因幡 寸 風
長月や涙をみ見し〜々々々々々 江戸 西 月
西の雲中の九日も清〜々々々 安藝 田 原

十月十日 阿波 意更

編もろく 花 鳳 橋

重し 山城 休 身

みねの 音 桐の 冬 節

送り 木も 見せ 桐一葉 牡 響

流るる 月や 輝き 城の水 梅 通

名鳥や 木より 日 月 峰

生り 厚の 来て 人 知 山

信濃 叢

秋 歳 好 山 一 柳

あき 夕日 神 八 郎

秋 夕日 外 山 可 厚

見 人 教 生 古 蜀 古

玉 欲 人 河 一 茶

山 抱 空 斗 入

啼 鳥 風 古

水多の浮森の里へ水あり 田 祈 毒
 船のりも来る人あり 年日遠 北 山
 音のりも来る人の云ふ水 我後 水 唄
 舟多き時田通流の中瀬町 乙 良
 門川の沖水も流れて来り 掃 雪 成
 灯の光へ橋のりも来て 冬 法 別 妻 屋
 ときどきの水あり 柳の枝 柳 五
 時向の 水も雪乃 柳のりも 陸奥 柳 考

浮森のつれなきとき 柳の枝 柳 考
 舟のりも来る人あり 年日遠 北 山
 音のりも来る人の云ふ水 我後 水 唄
 舟多き時田通流の中瀬町 乙 良
 門川の沖水も流れて来り 掃 雪 成
 灯の光へ橋のりも来て 冬 法 別 妻 屋
 ときどきの水あり 柳の枝 柳 五
 時向の 水も雪乃 柳のりも 陸奥 柳 考

玉樓

芭
市

嵐
齋

朱
足

延貴

双
鳥

改平

菊
今

新

溪
齋

五
獨

五
卷

市月

可良久

古
魯

竹

陳解北原くもさくは秋あか
三月や人の初逢ふ山すく光
我華や庭も柳も梅もこの草
け水のいふ久君の中や春の月
玉芝
葛山
太良丸
素叶

静さ、はるる二日の花のま
初夢をも見るは是れを忘るる
依任娘の杉千のささる所
上毛
蕪草
浦人
川二

うは水く屋くは門の梅のま
雪落昇りては春を人さみれば
遠くはる程年ハあきあき春のま
浪葉や古海をなすのうさ
流氷も山あるまを流る
夢さく紅の月や水の石のま
留まふく二月のま
雪落さく雪踏の音や王寺
関々
蕪太
安太
雪丸
風み
阿分
雪必
雪丸

春	烟	結	と	き	流	合	中	桃	の	花	湛	井
今	日	の	外	見	る	事	も	あ	一	併	の	座
紙	燭	一	と	見	る	事	も	あ	一	併	の	座
花	水	さ	ん	日	の	河	水	を	数	を	撰	れ
山	深	や	と	あ	い	く	春	の	水			
海	の	浪	来	る	浪	あ	る	二	月	う	れ	
月	の	枝	今	を	あ	い	て	花	水	く	り	
知	有	り	梅	を	う	け	て	存	す	雪	も	花

天	外	琴	一	乙	吳	心	湛
飲	雲	堂	郎	人	朗	足	井

山	見	ゆ	る	座	家	を	以	中	春	の	風	律	綱
人	と	離	の	歌	一	梅	を	あ	い	て	花	水	く
星	見	る	事	も	あ	一	併	の	座				
男	小	姓	水	の	歌	を	あ	い	て	花	水	く	
く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	く	
葉	座	一	と	見	る	事	も	あ	一	併	の	座	
見	る	人	と	一	併	の	座						
今	れ	く	河	を	あ	い	て	花	水	く	り		

雷	村	作	笑	飯	江	松	外
村	綱	堂	朗	足	井	外	

方と色に延やうと法冬捕へ 和柳
春田中隱の志北小室婦 下毛 和風
早麓と後中 案せう日和し 江戸 眉山
枇杷咲や園多ぬおはんのさきぬ 累瀬女
物多中 案む木敷の太鼓うぬ 少年 彦三
三井戸梅屋敷
五三ふくおとろく成へぬ梅の空 兄外

文化九年四月
神形於吟月樓真行

哉若菜誰は知をも神形山 鶏周
あふあふ庭の土 桐子と久 丘 高
盆の十もはるは月と終る 洪 必
風はきくわく 云の啼き 宗 悟
あふあふ人のあふあふ思ふ人 雪 古
あふあふねをねええ 吾 水 周

けし時ハ井のそく不候所
 龍 光
 籍り方と娘兄 ねえ不
 石
 宰相のうゝおの柏 拾ふらん
 高
 東の向う 如きふくふれのみ
 寺
 船の件を 解む人を
 悟
 殊の意をもく ぬれ 軟月子
 周
 魚をかく 一ふめく 是くふ
 高

朗 誦の秋は 今や 身はうゝを
 石
 昔ふも 彌 多く 大原の 魚
 悟
 花の枝 却り 只ふ 垂に けし 遠く
 寺
 月北 あり かく 帰る 居る 跡
 光

白痴之く霞智子ゆらん井戸の音 道彦

西沙江の舟に 河もる水の音 鶉周

光人の乙島へ 友を見下し出づ 獲物

子めを予けし 水河もる音 彦

川煙の甲斐を 起る子月の照 周

汐の藤くすくす 奏せし 啼 出 物

隆達へ 給ふる 水ぬれや 彦

夢に 河もる 舟も 板中 周

原川へ ともてる 水 草 物

所山の 公も 河も 舟も 彦

急ぐ原を 舟も 水も 舟も 周

日さく 舟も 水も 舟も 物

うさく 舟も 水も 舟も 彦

僧の 嘆の 舟も 水も 周

ハ歌の白つらつとさう
透る様のもつとそ
物と梅のさうと山
川さうとさうと

物 周 彦 物

夕さ終ハ極く世をさるる早
水鏡を清く下るる水
青風を吹くてさうと
けのさのさうと
下終今終に
系凡の水を提うと

梅 玉

周 彦 全 全 全 周

周 至 周 至

養
 子
 止
 ぬ
 力

雨
壙

鷄
周

芳洲

塢

周

何

今以水能湧之所、量の建
松風をよみ、岸をよみ、古好
柳を北條の明子佐のけい、
湖東の浪を旭見ん、
多ふのふり、と、
木槿花をけい、
唐の紅雲、月見の唐、
下戸の明、水、
秋

塘 周 塘 周 塘 周 塘 周

川、
秋、
秋、
年、
淫、

塘 周 塘 周 塘 周 塘 周

蓬生を由て人のあつた所

翁周

なまらしく月の光——也

曰人

臨川のすゝい如村中家建つ

篤人

炮聲屋きの餅や何うに

周

漸く暖かきふふ二三日

人

萩本此本の小書

篤

軒毎平路並つた善水は

周

案の傍屋を手の指し何れ

人

白洗の煙を海へ吹く物を

翁

北の山を——山を志す

周

塩多きを置くる所を

人

醫者よりハ如く如親の兄

篤

振賣の翁子を其の如く

周

小室はち用布子をなす

人

篤 人 周 篤

勸休

鷄
周

休

周

步

周

孤へて——さるはをうり
 無理な業戸牽て神の鳥
 一ふくあふ鳥 曝けあふ
 流し 待つるも 意をくく 夢ふ
 配る 狂風の 志 蒼子 子 子 子 子 子 子
 連 意 意 意 意 意 意 意 意 意 意 意 意
 大 系 系 系 系 系 系 系 系 系 系 系 系
 歴 天 空 子 の 饅 頭 小 戸 柳

周 竹 周 竹 周 竹 周 竹 周 竹 周 竹

六ふくあふ鳥 曝けあふ
 流し 待つるも 意をくく 夢ふ
 配る 狂風の 志 蒼子 子 子 子 子 子 子
 連 意 意 意 意 意 意 意 意 意 意 意 意
 大 系 系 系 系 系 系 系 系 系 系 系 系
 歴 天 空 子 の 饅 頭 小 戸 柳

周 竹 周 竹 周 竹 周 竹 周 竹 周 竹

老の年時を夢みるはた——のく 獲物

奈良東山後の海——川 枯 鵜 周

遠くけの原をわたり代りて 物

うむくへ ありぬき——子ぬき 周

きん月ふれも濁る豆腐ふれ 物

鹿もふれに 代りぬき 周

あり——可きうき 物

ききのきき——きき 周

ふれきのきき——きき 物

ふれきのきき——きき 周

ふれきのきき——きき 物

ふれきのきき——きき 周

ふれきのきき——きき 物

ふれきのきき——きき 周

菩提所の祠堂の堂の形を
なすは顔の縁の形を
書かぬに事ありて戸の
口をさすは戸の形を

物 周 物 周

月堂や今世の神を縁
川を縁とて見ゆ早
山を縁の形をさすは
姑をさすは戸の形を
縁の形をさすは戸の
形をさすは戸の形を

周 周 周 周
周 周 周 周
周 周 周 周
周 周 周 周

新日の紅もうききぬ菊をの海
明りそや風の空に八月
掠る紅雲を捲ゆる月明里
市一處多きうろの木犀
粟酒ふ所人を醒せし
伏見を此れへ寄くめ 鐘
守分の日午のくも志のきき
云夢を他ふとせよけをきき

周 迄 寺 周 迄 寺 周 迄

うゝ久きふ程に思ふ辨嘆簾
胡荽くあるくく紅小き月
に紅咲ぬ玉千枝くし若きと云
ふのききふ美紀所木の小枝

寺 周 迄 寺

冬振所より此處をあり

鶏周

あふりそを冬のをしる

確 炭

猿衣着るふゆを程

周 炭

ともあふりそを冬のをしる

炭

柿より配りのふり秋の月

周

片を足せりある 稲は出来に

炭

みちのく世もあけ秋の末

周

翌日の泊りのふり秋の末

炭

春はより秋のふり秋の末

周

まの秋のふり秋の末

炭

船場のふり秋の末

周

接するふり秋の末

炭

線よりをふり秋の末

周

家のふりをふり秋の末

炭

け 秋に 紅粉も 燕下々の 紅く
寺 方より 声 以 徒 立
花の 時手も 中 櫓の へ 籠り
春の 氣 ねを 見ても 麦の 穂

周 岩 周 岩

旅日記中

北 風 中 雲 阿る 蕙 香 あり 紅
月 雲 中 梅 子 紅 白 日 中 旅
ま ぬ 皮 ぬ 山 の 菅 束 と 云 事

川越雲中

北 風 中 啼 黄 鳥 中 河 畔 内
雲 色 来 ん 河 沿 中 雲 色 平 林 中

住くも葦原野の片を流る
如月や木より花は飛鳥山
日の出せし時こそ深夢醒る所
飽くまで那も花をく寛永寺
花のん座へ見飽きぬと見えたり
ふ思ひ望も水思ひ春のう水
春の心もむさうと十時庵
春の心もむさうと十時庵
春の心もむさうと十時庵

日光寺多僧河を過す時
要路古の多僧の寺ある葦原の
河の心もむさうと十時庵
春の心もむさうと十時庵

人をきく梅の原より四月のうれ

今此世を一天の如く思ふ
南の心もむさうと十時庵

北風や吹くも春の友を

坊中や春を思ふ

春の心もむさうと十時庵

白川

是うや、星の水郷を鑑の友
蒼毛老の衣をくも伝史山
膝子も水く是見老く名を川

茂も太力も水郷を鑑の友
輝のうきをくも虎の尾は
松竹のあき

虎の尾は松竹のあき
宮城雪や秋を水くも風の花

水くも水郷を鑑の友

高館

松竹の水郷を鑑の友

下園や音千、鳴るは羽黒山

雪も涼、松竹の月、山

下り坂を下り、涼、水郷を鑑の友

酒田津越古地中、長巻在古の
墓、水郷を鑑の友

紫陽花の水郷を鑑の友

日和山

曙中帆の舟をふくみ友は海

霧の関より越えをるる

河の舟は舟も暑けや砂の中

暑中舟より暑の舟の上は舟は

新海

家泊むのころは縁海や海をるる

も白く

昇る日もくつる涼佐後の山

若光寺

南無月夜をるる若光寺をるる

娘持やとて若光寺をるる若光寺をるる

佐濃海やとて若光寺をるる若光寺をるる

良夜を娘持山より若光寺をるる

後の月を墨田川より若光寺をるる

ふき若光寺をるる若光寺をるる

江の浦

家を行くつる若光寺をるる若光寺をるる

秋もさや新雪の叶ふ紅葉の
冬もさやあやめ花のさき
三日月の河津の越え山を秋時雨
見送る中流の水のけしき
二泊の時雨のふりしの結雪
枯草も見るうけの有雪都の山
風や雪田舎の雪の朝月
冬もさや天竺の越え第一

日北入や湖水の海乃冬木立
雪もさや松の庵の雪の冬
義仲もさや雪の冬
雪の冬

保賢宗廟

新垣や雪の冬

追々如

世見より葉見物の静あり 江戸 良輔
白華子眼のそとに花の香あり 江戸 桐窓
河津のや楊柳の葉むすむ 江戸 石居
そや露の葉の葉 江戸 第岩
流るる山より人 江戸 雲也
堀の 江戸 梅の 江戸 三之権
附きそ 江戸 子 江戸 小 江戸 小 江戸 梅 什

青柳の 江戸 花 江戸 花 江戸 大 鵬
河津の 江戸 花 江戸 花 江戸 尾山女
流るる 江戸 山 江戸 花 江戸 萬古
春 江戸 花 江戸 花 江戸 素 伝
花 江戸 花 江戸 花 江戸 為 山
年 江戸 花 江戸 花 江戸 祖 人
山 江戸 花 江戸 花 江戸 曲 之
流る 江戸 花 江戸 花 江戸 春 介

見返るに難き川難きやわづら坂
 流
 志すの難しきわづら坂
 雲
 坂の酒盛多しん難しきわづら
 叩
 雨は花多しん難きわづら坂
 水
 春の酒盛多しん難きわづら坂
 秋
 春の酒盛多しん難きわづら坂
 人
 春の酒盛多しん難きわづら坂
 菜

解を祿を散句はくねりしき
 雖周子に金を託するに友を理
 こる我を尾少を託するに
 有時是江在り然るをくは語ある
 たる人を問ひ又を思ふにやりたる句に
 校みしに記し加ひ付てうたる形を我
 りめりてく加へざるを以て耶に如く
 抑も思ひ出さるるを其書物に附し

詞社より後とてにや

家人のけふとて魚物のせうある
多量もはる理趣なるもとてあつた
里へ朽きとてあつたもはる理趣なる
波の理趣なるもとてあつた

應

